大海賊時代に来た死神

死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大海賊時代に来た死神

【Ｎコード】
Ｎ４５０３Ｙ

【作者名】
死神

【あらすじ】
現世で寝てしまった死神零番隊長。起きたら何故か大海賊時代のＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に居た。その主人公（死神）が海軍に入って頑張る話。

1　あれ？ここはどこですか？（前書き）

作者が書いてる2作品と同じ名前ですが、設定は同じですが、話と繋がってません。

1　あれ？ここはどこですか？

ここは、海軍本部の医療施設の一室。
「う・・・？？？なんでだ？」
疑問を持っていると、

ガチャ
？？「おお。起きたかい？」

「（誰だ？）はい。」

？？「おっと、自己紹介をしてなかったね。私は海軍本部駐在の医療班員のアスクだよ。」

「俺は何故ここに居る？」

「信じてくれ無いと思うが、本当の話なんだ。君以外の海兵らが目撃しているからね。」

「だから、なんだ。」

「いいかい、良く聞いてね。　今日は全員集合して情報会を朝開いてたんだ。医療班も一応海兵だから、集合してたよ。それで開いてから２０分位たった時かな？突如左の空間にヒビが入ったんだ。全員何事か！？って騒いだんだ。そしたら、ヒビが開いたんだ。まるでチャックを開けるように。その中から君が出てきたんだ。・・・・・信じられるかい？」

「そうか。俺は、そこから来たのか。」

「!?・・・普通、驚くでしょう?」

「本当は驚いてるさ。自分でも分からない。なんでこんなに冷静なのかが。」

「そうかい。」

「で、ここは?」

「ここは海軍本部にある医療施設の一室だよ。」

「海軍本部??」

「海軍本部は偉大なる航路(グランドライン)の真ん中にある島“マリンフォード”に建設した建物のこと。海軍総本山でもあるけどね。」

「・・・・・」

「ここは精鋭が集まってるんだよ。」

「海軍ってなんだ?」

「海軍から知らないのかい?教えてあげるよ。世界政府直下の海上治安維持組織だよ。」

「そうか。」

「そういえば、君の名前はなんだい?」

「俺は櫻井（さくらい）　海（かい）。」

「海君だね。もうそろそろ、情報会に戻らなければならない。君も連れてかなければならないけど良いかね？」

「ああ。」

海軍か・・・。海兵は・・・海軍兵士の省略言葉か。

そして、5分位歩いてオリス広場に着いた。

??「報告しろ。」

「はい。名前は櫻井　海。海軍をしらないそうです。」

「（この変な人は誰だ？）」

「どうした？」

「いや、あの人誰かなー？って、思ってただけ。」

「あの方はセンゴク元帥だよ。」

「元帥？って何さ。」

「あれ？まったく軍隊のことは知識無し？」

「かもな。」

「（困ったぞ。）」

元帥が困っている。

「軍隊の中で一番偉い人だよ。」

「あ、そう。」

「（こいつは何者だ？）」

「あとでこういうのは教えるからね。」

「お・・・おう。」

「こっちから聞いていいか？」

「なんだ？」

「おい、だから敬語！」

「アスク、俺は敬語が苦手なんだよ。」

「間違ってでも言った方が良いと思うが？」

「多分、言った事無いから無理。」

「言った事も無いのかい？」

「そうだよ。」

「聞いてるか？」

「聞いている。」

「何故、海軍を知らない？」

「（それ、私も聞きたかった。）」

「俺が居た所は、軍隊なんか関係無かった。てか、軍隊すらない。」

「Σ軍隊が無いだと！？」

「てか、俺が見えるのか？」

「何を言っている？」

「ちょっと待ってろ。」

そう言って、刀を収納する。すると白い隊長服が黒に、黒い死覇装の上が白いTシャツに、下が薄水色のジーパンに変わった。

「Σ何だ！今のは！？」

「今の格好が見えるのは当たり前。さっきの格好は普通、見えない。」

「何故だ。」

「違う世界に来た影響かもな。」

「違う・・・世界だと！？」

「だから、言ったじゃねえか。俺の居た国は軍隊なんて存在しない。代わりに自衛隊が存在する。自衛隊については質問するな。」

「・・・だが、何故普通の人が見えないのだ？」

「さっきの格好は、“死神”の格好だ。」

全員「「「「「！？」」」」」」

「（“死神”！？）」

「黒い死覇装を着て斬魄刀を持つ人をそう言う。別に無差別に殺すというお前らの思想とは全然違う。」

「死神は何をする。」

「俺らは悪霊・虚（ホロウ）の退治者だ。」

「虚（ホロウ）？」

「大体巨体だな。あれが普通サイズだからな。」

そう言って、快速船を指す。

「！？・・・まさか！？」

「（情報と一致してる？）」

「分かったか？死神は護廷十三番隊に所属している。」

「じゃあ、貴様は？」

「一番隊～十三番隊まであるが、俺は零番隊だ。一人のみだ。」

「何故、隊が違う。」

「一番隊の隊長が一番強いようになってるんけど、俺、そいつ・・・山じいより強いからそうなった。山じいより経験は少ないけどな。死神の寿命でどのくらいなのかな？山じいはもう千年生きてるけど。俺は２５年。」

「！？」

「千年！？」

「そうだよ。死神はまだ生きる。」

「そうか。だいたいの事は分かった。そこの列に並んでいれば良い。情報会を再開する。」

だいたいの事は分かってもらえたかな？

1　あれ？ここはどこですか？（後書き）

どうでしょうか。ボーっとしてたら思いついた。

感想等、お待ちしてます。

2　主人公設定とオリキャラ設定

＝主人公＝

【名前】
櫻井（さくらい）　海（かい）

【職業】
トリップ前：死神
護廷十三番隊の特別部隊、通称“零番隊”所属。零番隊隊長。
トリップ後：海兵
（予定）海軍本部少尉→海軍本部大尉

【年齢】
見た目：１４歳
実際：２５歳→２６歳

【戦い方】
トリップ前：鬼道と（白打と）斬魄刀一刀流
トリップ後：鬼道と斬魄刀一・二・三刀流と覇気

【斬魄刀】
〔青龍（せいりゅう）〕
主に水関係の能力を持つ。

〔銀虎(ぎんこ)〕
主に電気系の能力を持つ。

〔黒鷹(くろたか)〕
主に闇系の能力を持つ。

この三本はそれぞれ伝説級の斬魄刀と言われている。その三本を同時に持った者は最強の死神になると言われているが、海が持つまで信じる者は居なかった。これも、海が零番隊に入ったきっかけ。

【降魔剣】
別名“俱利伽羅”と呼ばれる、不思議な刀。

〔白鳳凰(はくほうおう)〕
刀を抜けば封印されている白い炎が開放され、白い炎を纏いながら戦う。

降魔剣には珍しい治癒能力と火系の能力を持つ。

【零番隊】
隊が着いているが、入ってるのは海一人のみ。入れるのは、山本元柳斎重国もと“山じい”こと一番隊長より実力があり、中央四六十室にも認められないと入れない最強部隊。

隊花：“オリーブ”　花言葉：“平和”

【覇気】

特殊な“覇神の覇気”

【その他】
・生まれつき特殊能力と不思議な体質を持つ。それはゼウスの実の息子であるため。
・潜水能力が高い。
・資格が大好きで合格した数が１００を超えている。

【弱点】
・気温が４０度越えした日。
・参謀系

＝オリキャラ＝
【名前】
アスク

【職業】
海軍本部准将兼本部駐在医療班員。

【能力】
悪魔の実の能力者では無い。

【覇気】

見聞色と武装色が特化していて、戦闘に向いている。

【その他】
・六式の使い手
・ドレークとは仲が良い。
・次期医療班長
・来月に少将に昇格する事が決まっている。

＝世界観＝
原作通りの大海賊時代。違うのは、虚（ホロウ）が存在するのみ。
（後、海が居るだけ。）

とりあえず、こんな感じです。まだまだ本編でオリキャラがバンバン出てきます。

2　主人公設定とオリキャラ設定（後書き）

アスクの職業の所、漢字だけだから、読みにくい！！？
次回は主人公が疑問を持ちます。

3　なんでまた事情聴取をしなければならない

＝オリス広場＝

セ「情報会を再開する。次！」

??「はっ！！東の海（イーストブルー）で、魚人海賊団を発見。・・・・・」

「なあ、アイツ誰？」

ア「ああ、あいつはライン。海軍本部准将だよ。」

「へ～。じゃ、魚人は？」

ア「なんて説明すれば・・・・まあ、生まれつき人間の腕力の１０倍の力を持ってる種族かな？あと肌の色が違うのと水かきがついてることかな？ほとんどの魚人とか人魚は魚人島に居るよ。」

「ほえ～、ここはいろんな種族がいるんだな。」

ア「ああ。ん？」

「どうした？」

ア「あの、元帥。なんですか？」

セ「・・・・・少し、声を小さく出来ないのか？」

ア「あー、無理です。」

セ「まあ、良い。これで、情報会は終了だ。だが、まだ集会は終わらない。」

「え！？終わっちゃったの！？」

ア「うるさい。」

ガ「何故じゃ、センゴク。」

セ「死神の情報がそんなに無いだろ。」

ガ「なるほど。」

セ「分かったか？聞くぞ。」

「・・・・・・・。」

なんか違くね？さっき“だいたい分かった”って言ってたぞ？

ア「返事くらいしろよ！」バシッ

「イテーよ、ったく。」

セ「・・・ゴホン。気になってるのは沢山ある。順番に聞いていくが良いか？」

「もう、良いよ。どんどん質問して来い。」

セ「まず、斬魄刀から。」

「斬魄刀は死神か死神代行しか持てない。斬魄刀を選ぶ事も出来ない。斬魄刀が持ち主を選ぶんだ。」

モ「ちょっと、待った。」

「？」

モ「ああ、私はモモンガ。海軍本部中将をやってる。よろしくな。」

「おう、よろしく。で、質問は？」

モ「斬魄刀って本当に存在するのか？」

「さっきの刀が斬魄刀だけど。」

モ「そうか、“伝説の刀”って、呼ばれる斬魄刀は存在したのか。」

「降魔剣も在るぞ？別名“倶利伽羅”」

ア「え？あれも在るの？」

「おう。まあ、それは後で。」

セ「順番と言ったが2つしかない。次で最後だ。『虚（ホロウ）』についてだ。」

「虚か。」

セ「そうだ。」

「虚は、現世を荒らす悪霊。その正体は何らかでの理由で落ちた人間の魂。人間の魂魄が主食で、生きた人間を襲っては死に至らしめる。と言う生き物みたいな奴。」

ア「どんな奴だよ・・・・・。海賊より悪じゃねえか。」

「かもな。」

ア「特徴とかは？」

「特徴は、ある例外を除いて白い骸骨のような仮面を付けている奴。仮面は心を失った本能を隠す為だとか。」

ア「へえ。」

「あ、ちょっと待って。虚について一気に話すからメモしたい奴はしといた方が良いと思うよ？」

そう言ったら、ほとんどの海兵・記者がメモを取り出す。まあ、記者は妙な貝？を取り出したけど。あれって、ボタンがあるんだね。始めて見た。

「大きさはいろいろ。小さいほど知能が高く、強い。逆に大きいほど知能は獣と同じくらい。・・・・・・・」

まあ、ここは省略する。長いから。

～12分後～

「分かった？」

セ「ああ。だいぶ分かった。それで言いたいことがある。」

「？」

なんだ？

セ「アスク。お前が言え。」

ア「はい。海。さっきの虚はここの世界にいるんだ。」

「！？」

なんで！？

ア「今日からちょうど1ヶ月前だな。虚がここの世界に来たのは。」

「・・・・（マジで！？どうやって来た！？）」

ア「その虚がこの世界で暴れてる。多大な損害を生んでいるのはその“虚”だ。」

「損害って、島を荒らしたりとか？海賊よりも多い？」

ア「そうだな。両方とも合ってる。」

「そうか。なんか俺がここに来た理由がなんとなーく分かったような。」

ア「・・・・。？」

「ん？あーあれか。」

ア「黒揚羽？」

オ「ん・・・・・・・・・・・・・。」

モ「おい、それを見るな。」

「？」

モ「こいつはクモクモの実を食べた蜘蛛人間なんだ。」

「へー。蜘蛛人間な。世界は広いなー。」

ちょっと待った。蜘蛛人間ってスパイダーマンじゃねえの？だって
そうだろ？へーじゃあ、あいつは指先から糸が出たりしてｗｗｗ。
（笑）

ア「あ、止まった。」

「地獄蝶だよ。ん？」

『話したい事がある。そこの世界の事だ。』

「山じい？」

『そうじゃ、お主、今違う世界に居るじゃろ？』

「今、ここの世界に虚が暴れてるって聞いた。“その虚を全て退治

せよ”だろ？」

『その通りじゃ。できるかの？』

「相当な・・・・膨大な時間が掛かるけどな。それでも良いか？」

『ＯＫじゃ。すまないの。こんなに大仕事を押し付けて。』

「俺は零番隊長だ。元々大仕事しか来ない所だからな。」

『本当にすまない。』

「ああ、俺は任務を必ず終了させます。」

『ふむ。頼んだぞ、“櫻井隊長殿”。』

「了解。」

通話が終わると、地獄蝶は舞い上がった。

「アスク。」

ア「ん？どうした。」

「俺、海軍入るよ。」

セ「！？」

ア「！？いきなりどうした！？」

「俺、ここに来た理由が分かった。ここの世界で暴れている虚を全て排除する事が仕事だった。元々大仕事しか来ない部隊だからな。少し慣れてる。」

ア「そうなんだ。」

モ「全て排除は難しいぞ。」

「でも、仕事なんだよ。隊首会がある時以外はここの世界で任務を終わらせなければならない。ただ、どこかの組織に入っても良し。と言う条件もあるからさ。しかも、ここの世界の事もよく知らないから。で、海軍(ここ)に入ろうかと。」

ア「私は賛成だ。」

モ「私もだ。」

セ「ふむ。海軍本部の士官学校に1年通って貰ってから正式な海兵にする。それで良いか？」

「OK。」

これで、明日から士官学校に通う日が始まる。

3　なんでまた事情聴取をしなければならない（後書き）

はい。とりあえず、仕事が決まりました。
次回から、「士官学校編」が始まります。

4　鍛錬場　～破道確認～

＝士官学校の教室＝

先「はい。今日入学した、昨日いきなり現れて有名人の櫻井　海君です。」

おいおい、小学校の先生かよ。おい！

先「櫻井君は「君付けなくて良い。」櫻井は、任務でここの世界に来てるので、居ない時があります。それでは、真ん中の席へ。」

君付けは気持ち悪い。

後、この席順は毎日変わるらしい。一番前の一番左が一番成績が良い学生だ。

しかし、今日は４月８日。ちょうど、学生達が一学年上がる日なのだ。その時は席順は関係無い。後、このクラスは成績優秀の人しか入れない。

ちなみに席はこうなっている（日常）

１　２　３　４　５　６　７

８　９　１０　１１　１２　１３　１４

１５　１６　１７　１８　１９　２０

今日の席は１１番だ。

今日からほとんどの日は、全て体力作り。（勉強する事がほとんど

無いため。）

??「ねえ、ねえ。櫻井〜。」

「誰だ。」

??「僕は、ファール。」

ファールって、おい。

ファ「よろしくね〜。櫻井君。」

「海で良い。ファールって呼んで良いか？」

ファ「うん！よろしく！」

「おう。」

ファ「ほら、ほら、早くしないと！成績が下がるよ！」

「後で行くから。」

俺には瞬歩があるからな。瞬歩の速さは夜一と同じくらいで有名だからな。

ファ「えー。行こう！」

「分かった。」

ファ「！！ヤバイよ！あと2分しかないよ！」

「捕まってろ。」

ファ「え！？」

「良いから。」

死神の格好にもならずに瞬歩が出来るようになったから楽だ。

ガシッ

「行くぞ。“瞬歩”」シュンッ

＝大鍛錬場＝

先「遅いな。櫻井とファール。」

シュンッ、スタッ。

ファ「おお！ギリギリセーフ！」

「間に合った。」

モ「！？」

「あ、モモンガ発見。」

モ「今は駄目だぞ。鍛錬だからな。」

「あ、そっか。でも、無理だ。」

モ「・・・・;」

周りを見ると、（元帥と三大将と参謀と拳骨を除いた）海軍上層部と少将数名と准将数名とクラスメイトが待っていた。

先「櫻井は知らないか。俺は本部大佐だ。」

「あ、大佐だったんだー。」

先「そうだ。」

この人、大佐らしい。

先「今から、何を鍛えても良い。六式を使いたいなら六式を、剣術を磨きたいなら剣を使ってる将校に頼め。俺に頼んでもいいぞ。櫻井は自分で鍛えたいなら、自分でな。以上！」

すると、学生達が将校に頼んで行く。

ファ「なあ！海は？」

「ファールはどうするんだ？」

ファ「僕は六式だよ。アスク准将に頼もうかな？って・・・あ、取られた。」

「ドーベルマン中将とかは？」

ファ「それだ！じゃ！僕行ってくる！」

「おう！」

俺は自分でやらないとな・・・。

先「ん？櫻井は自分でか？」

「そうだが？」

先「頼めば良いだろ？」

「俺の斬魄刀を使うとき霊圧が高いことが多い。」

先「ふむ、そうか。じゃあ、頑張れ。」

「おう。」

どうしよう。鬼道でも鍛えようかな？最近なかなかやってないからな。

誰も居ない所でやろう。

「よし、ここの周りには人は居ないな。」

ここで鬼道の威力を確かめよう。

モ「（何をするつもりだ？）」

ファ「はあ！！」

ドー「あまい！もっと、早く走れ！」

ファールは只今、“剃”に挑戦中。

「破道の四、白雷！！」

指先から一条の雷を無事に放つ事に成功。威力もある。壁に焦げ跡ができたけど・・。

ファ「！？何アレ！！」

んー、物質・・・・あ！砲弾発見！

ガラガラ

ガ「おい！死神！その砲弾を・・・・？」

「破道の十一、綴雷電！！」

砲弾に沿って、電撃を放った。これも成功。

ガ「！？」

砲弾は無事。まだ使うかもなー。そのままにしよう。

ガ「なんじゃ・・・今のは・・・・。」

次は伏火か。これは大丈夫だからな。うーん。この砲弾をなんとかしたい・・・あ、あれがあった。

「破道の五十四、廃炎！！」

円盤状の炎を放ち、砲弾を焼き尽くした。

全員「「「「「砲弾がああああ！！！！！」」」」」

「ん？野次馬？」

ファ「すごいよ！すごいよ！」

「あ、ファール。」

ファ「僕、“剃”習得したよ！今、“嵐脚”に挑戦してるよ。」

「頑張れ、ファール。」

ファ「ああ！」

よし。鬼道はこれができればもう大丈夫だ。

次は・・・・なんでもいいからとにかく確認しなければ。

4　鍛錬場　～破道確認～（後書き）

次回も確認です。なんの確認かは次回で。

5　斬魄刀の威力確認

「・・・・・。縛道は相手が居ないと無理だし。まあ、良いか。応用系を確認するか。」

応用って、まあ、なんとなく。乱菊が言ってた。

あとさ、物凄く尊敬の視線を感じるんだけど・・・・野次馬とかクラスメイトとか。

「なんだ。」

気になるのが、なんで俺こんなに冷静なんだよ。多重人格みたいだな、おい。

ファ「なんか尊敬しちゃう〜。」

??「櫻井すごウィーね！俺、ニロでーーす！！」

居るんだ、ここにも、チャラ男が。

ニ「死神なんだよねー。」

「ああ。お前は・・刀？」

ニ「そうさ！多分、強い方だぜ！？学生の中で。」

「ほう。」

ニ「手合わせしないか？」

「いや、やめたほうが身の為だ。」

ニ「何でだよ。」

「後で、斬魄刀の威力確認するから。今は違うけど。」

ニ「分かった！」

よし、チャラ男が離れたから確認しよう。

で、斬魄刀をぬ・・・・あ、ここでやりたくないな。海に向けて放ちたいな。下手すると鍛錬場が消滅しちゃう！

ア「それじゃあ、港へ行くか？」

「？声に出てたか？」

ア「まあな。」

「港に行く。」

ファ「僕、斬魄刀見たい！」

ニ「俺もだ！」

「はあ、見たい奴は遠くから見てろ。近くても半径４０ｍ近づくな。先に行く。“瞬歩”」

シュンッ

モ「剃では無いようだが・・・。」

ファ「よし！早速！“剃”」

ニ「ああ！ファール！“剃”」

ファールとニロは意外と優秀です。

＝軍港＝

スタッ

ふう。着いた。ちなみに今は死神の格好になってる。

ファ「うわああ！！！すっげーーー！！！！」

ニ「本物ーーーーーー！！！！！！！！」

モ「本当に在ったみたいだな。」

なんかやりにくいな。まあ、約束は守ってるから良いか。

「今から斬魄刀とは関係ないことをするから。」

うん、この二つは関係無い。

ちょっと待って、最初のやりにくい。なんで青雉とかいるの！？てか、上層部全員集合しちゃったよ。政府と海軍の。五老星居るし！これは昨日アスクから教えて貰った。

「破道、氷牙征嵐！！」

海に向かって冷気の渦を放つ。

ピキィーーーーーーン！！！！！！！

全員「「「「「「凍ったああ！！！」」」」」」

青雉「あらら？この子何なの？」

こいつウザイ。

まず、銀虎を抜く。刀先を凍った海に向け、

「破道、金剛爆！！」

ジュワーーーーーー

全員「「「「「「溶けたあああああ！！！！！」」」」」」

先から大型の火球を放ちました。（笑）

思ったけど、鬼道だけでこの世界のほとんどの人に勝ちそうだな（

笑）

ファ「・・・・・」（驚）

「今から斬魄刀の出番だよ。」

始解はしなくて良いか。

「まずは銀虎！・・・雷砲（らいほう）！」

文字通り、一振りし、その斬撃が雷の砲弾になり、出てきた海王類を襲う。

ギャアアア！！！

「悲鳴上げてる・・・。」

ファ「！？」

ニ「斬撃が形を変えた！？」

そういう技だし。もうちょっと披露しますか。

お？ちょうど海王類がバンバン出てきた！良い的発見！

「大雷（おおらい）」

縦に振って出てきた斬撃が雷に変わり、大型海王類を４匹直撃。

「真っ二つだ・・」

モ「・・・・・・。」（汗）

「あー俺、三本の斬魄刀に選ばれたから。どれも斬魄刀の中でも伝説級の。」

モ「伝説の伝説！？」

「そんな感じ。」

「次は青龍。・・・・・・水蛇（すいだ）！！」

水の蛇。相手に向かって空間を泳ぐ。

「次は黒鷹。・・・・・・黒穴（ブラックホール）！！」

突如、海王類の真下にブラックホールできた。まあ、斬撃が海中を通してそこにできたものだけど。ブラックホールだから、海王類が吸い込まれていく。うん。奇妙な光景だな。

あまり使いたくないなー。でも、使う。矛盾してるな。

斬魄刀を納刀する。

ファ「すっげーーー！！！！！！」

ニ「こりゃ、勝てないな・・・・。」

モ「そりゃそうだ。」

「ふう。そうだ、白鳳凰も一つやろっか。」

何にしよう。・・・・あ、技はゾロとかと一緒の事が多いから。

「一刀流、飛竜火焔(ひりゅうかえん)!!」

はい、ゾロと同じ技です。

「確認終了。ん〜〜っ、はあ。とりあえず休憩。」

5　斬魄刀の威力確認（後書き）

技が・・・・普通。（笑）
しっかし、疲れた・・・。

次回は決まってないね。学校で考えてきます・・。

6　ここの世界に来て初めての虚退治

＝翌日＝

ファ「海ーーーーーーーー！！！！！！！！！」

「なんだよ。ふぁ～～～～。」

ファ「港に変な生き物がいるんだよ！！巨大の！」

「まさかな・・・・。」

まさか、虚じゃねえよな！？俺はいつも死神の格好にしてる。

いつでも出撃出来る様に。

「ちょっと行って来る！“瞬歩”！！」シュンッ

ファ「ああ！！！行っちゃった！！追わなきゃ！！」

＝軍港＝

海兵「なんだよ、この生き物・・・。ヒイ！」

??「オイシソウダナ・・・・。」

海兵「ど、どっか行け！」

??「クワセロ・・・・。」

海兵「・・・・」ガタガタ

シュンッ、スタッ。

まずい！海兵がやられる！

ザシュッ・・・・スーーーーー

危ねー。虚を斬り遅れたらこいつ死んでたな。

「大丈夫か？」

海兵「・・・・。」

「あーあ。失神してるし。」

まあ、しょうがないな。

ファ「海ーーーーーーーー！！！！・・・・！？」

ア「大丈夫か！？」

「あ、アスク。ちょうど良いとこに来た。この海兵よろしく。」

ア「こいつ・・・失神してる。」

「虚に襲われそうになって、失神した。虚は斬っておいたから大丈夫。これから忙しくなりそうだ。」

ア「そうだな。」

ファ「え！？ここにも出たの！？」

「ああ。」

ファ「怖いよーーー！！！」

「お前、軍学生だろうが。」（苦笑）

ファ「これは、無理ーーーー！！！！！！」

だろうな。いくらなんでも一般は無理だろう。

ファ「ねえ！報告書とか書くの？」

「当たり前だ。」

ファ「ええ！？」

「でも、書くことは少ないからな。」

ファ「そうなんだー。」

「ああ。戻るぞ。」

ファ「ああ！待ってよー！」

＝教室＝

先「今日の朝にホロウを発見し櫻井が対処してくれましたが、緊張は無くなりません。」

ニ「え、じゃあ。海は？」

ニロは席順番号は3番。

ガラガラ

ファ「遅くなりました。」

ファールは席に着く。ちなみに番号は2番。

ガラガラ
「アスクの所に居ました。」
先「ご苦労様です。」
「どうも。」
ファ「海！海は1番だよ！」
「ああ。」
どうやら、1番のようだ。

先「1番の櫻井　海。2番のラックス・ファール。3番のレオ・ニロ。以上3人は一年間番号は変わる事は無い。実力が分かった。昨日、海軍上層部と政府上層部が会議で決めた事だ。」
??「すっげーな！」
「？」
誰だ？
??「俺はオリック。ラニーヨ・オリック。今の番号は六番！よろしくな！」
「よろしく。」
こいつは、最も外国人っぽい名前をしてるな。

先「櫻井は今日・・・今から、海軍本部の上層階へ行け。そこの階段で案内の海兵がいるはずだ。そいつに着いて行け。今日は海は仕事のみだ。」

「分かった。」

早速、行こう。

6　ここの世界に来て初めての虚退治（後書き）

次回は仕事です。

7　総帥と対面

＝階段＝

階段を上り始めてからどのくらいの時間が経っただろうか・・・・・・。

海兵「あ！」

「・・・・・」

海兵「気づいてください！」

後ろ？

「・・・朝、虚に襲われそうになった海兵か？」

海兵「はい！助けてくれてありがとうございます！」

「まあ仕事だからな。」

海兵「もしかして、上層部に会うんですか？」

「そうだが。まさか、お前が案内役か？」

海兵「はい！！僕です！！付いて来て下さい。」

「ああ。」

しばらく歩いて、大きな扉の前に付いた。

海兵「ここです！では！今日はありがとうございました！」

「ああ。じゃあな！」

・・・・・・・・・・・前言撤回。扉じゃなくて、襖（ふすま）だった。

・・・・・ってか、大きすぎるだろ。なんだよこの大きさは・・・。巨人族が居るから納得できるけど、よくこんな大きい襖をあけられるよなー。まあ、ここの世界の人間って大きい・・・・人間じゃなくて、もう生き物全体がデカイか。ここは弱肉強食の世界だな。

「よっ！」

ススススーーーーーーーッ

どどーーーーーーーーーーん！！！！！

「・・・・・・・・」（汗）

なんでこんなに居るの！？全員集まる必要あるのかーーーー！！！！！！！

どんだけ、重要な会議をやってたんだよ！！！・・・・俺らみたいだけど・・・・。

これ、絶対に昨日のままだよね？

セ「遅かったな。」

「・・・・・・ずっとこのままだっただろ？」

絶対にそうだ。

セ「そうだ。」

「ここで寝てたのか？」

いくらなんでも、それは無いだろ。

セ「そうだ。」

「・・・・・・・・何やってんだよ。」

サ「うるさいけぇの！」

「お前誰だよ。」

サ「わしゃあ、サカズキじゃい！大将じゃあ！」

「怒る事は無いと思うが？」

サ「うるさいけぇの！」

「はいはい。・・・・・・はぁ。」

ここは、大丈夫だろうか。身の安全を大切にしないとな。

セ「そこの席だ。」

ここか。

セ「ふむ。」

？？「センゴク、ちょっと良いか？」

セ「コングさんどうぞ。」

コン「おれは、世界政府総帥のコングだ。」

「俺も名乗った方が良いか？」

コン「そうだな。政府の人間は知らん。」

「俺は、護廷十三番隊特別部隊通称“零番隊”の隊長、櫻井　海だ。」

コン「零番隊って事は普通の隊より強いって事か？」

「そうだ。零番隊はまだ一人しか居ない。」

コン「お前だけか。」

「ああ。」

コン「まあ、お前の威力確認だったか？それを見たが・・・、強すぎないか？」

「あれは基本だが？」

コン「！？あれで基本って言うつもりか！？」

コングはバンッっと机を叩き怒鳴る。

「だから、さっきので察してくれ。俺は零番隊隊長だ。」

コン「隊長がどうした！」

セ「何故、そんなに落ち着いてられるのだ？」

サ「覇気が出てるっちゅーに。」

なんか言ってるし。

「零番隊だ！」

コン「それがどうした！」

「零番隊だから、それくらいの強さが無いと勤まらないんだよ！！！分かったか！！」

あ・・・・怒鳴っちゃった。

コン「・・・・・すまない。」

「いや・・・・・。」

コン「気にしないでくれ。だが、今のは本当にすまなかった。」

「・・・・・・。」

なんか、気まずいぞ・・・、この空気・・・・。

7　総帥と対面（後書き）

終わり方がああああ・・・・・・orz。

8　今後について

沈黙が続く。

「・・・・・・・・」

その沈黙を破ったのは、

セ「コングさん・・・・。」

センゴクだった。

コン「ああ。」

セ「櫻井。今後について話す。」

「今後？一年後の事か？」

セ「そうだ。」

「一年後は俺は海兵。階級か？」

セ「察しの通りだ。櫻井の階級についてだが、卒業したら少尉から初めて貰う。」

「何でだ？俺は一番だからか？」

セ「そうだ。だが歴代の一番だった海兵はここにも居るが、少尉か

らは始まらない。皆、曹長からだ。何故、少尉から始まるか。それは、櫻井の実力を見て私達で決めた事だ。」

「まあ、俺は拒否しないけど、拒否権は無いんだろ？」

セ「そうだ。それでだな、この一ヶ月間どうするんだ？」

「そりゃあ、仕事だろ。」

セ「そうか。見ることは？」

「さあな。」

セ「・・・・・・。まあ、いい。もう用は無い。」

「そうか。じゃあ、俺は戻る。」

ガチャ・・・・・バタン

ふう。教室もど・・・・あ、もう終わってる。

食堂行こうかな？

＝食堂＝

ざわざわ

賑やかな食堂で飯を受け取る。

ファ「あ！海！」

ファールの向かい側に座る。

「よお。なあ、お前って卒業後の階級って決まってるか？」

しーーーーーーーーーーーーーーーーーーーん

いきなり静かになった食堂。

「どうした。」

ざわざわ

ファ「決まってるけど。」

しーーーーーーーーーーーーーん

再び静かになる食堂

トントントン

調理の音しか聞えない。

ニ「おれも決まってるよ！」

トントンｔ

あれ？止まった？

トントントン

「階級は？」

なんか海兵らが止まってるぜ？なんでだ？

ファ「軍曹から。」

トントン・・・トントントン

一回止まったぞ？

ニ「俺も軍曹から。海は曹長からだろ？」

トントントン

「いや、俺は実力を買われて“少尉”から。」

・・・・・・・・・・・・

あ？確実に止まったぞ？

全員「「「「「「「“少尉”からあああああ！！！！？？？？」」」」」」」

「よくハモるなぁここは。」

いつもそう思う。

ファ「え！？マジ！？」

「だってさっき言われたもん。」

？？「ヘルメッポさん、あの人凄いですよ。」

ヘ「聞いたらわかるだろ、コビー。しかも、俺達も見たからな。」

コ「なんか憧れです！」

ヘ「まあな。」

ア「へえ。“少尉”からか。頑張れよ？」

「ああ。」

ア「そういえば所属部隊は？」

「あー、中将以下を希望したよ。毎年変わるらしい。まあ、変わら

ない事もありそうだけど。抽選だから。それで、今日ここで・・・・・
あ、来た。」

ア「おお。抽選箱だな！」

「ここから引くようだ。」

オ「この中に紙が入ってる。初回は、中将１１名だが、ラクロワとかも入れて欲しいと言ってたが・・・良いか？」

「？」

オ「巨人族だ。」

「別に良いよ？」

オ「そうか。」

「・・・・となると？１３名か？」

ガサガサ

オニグモが抽選紙をかき混ぜてる。

オ「そうだ。この箱に手を入れて一枚だけ取れ。」

「・・・・・なあ、何でお前らまで・・・・・。」

ファ「だって、これで決まるんだよ？」

「そうだけどさ。」

ガサガサ

ファ「とか言いながらもう手突っ込んでるじゃん！」

「まあな。これで良いか。」ヒョイ

オ「誰だったか？」

紙を開けるとそこに書いてあった名前は・・・・・・

Ｄａｌｍａｔｉａｎ

ダルメシアン中将だ。

オ「ちょっと、待った。ヒントくれ。」

「ヒント？・・・名前に動物名が入ってる奴。」

ガーーーン

入ってない中将が落ち込む。

オ「うむ。誰だ？」

「犬。」

オ「犬？」

ドー「俺か？」

ダ「いや俺だろ。」

「後者。」

ドー「・・・・・・。」

ダ「俺か？」

「ああ。よろしく。」

ダ「よろしく。」

ドー「あ・・・・・・。」

「あはは・・・・ドンマイ。」（苦笑）

ドー「あ・・あ・・・。」ガクッ

あ、落ち込んだ。

ダ「フッ。」

ドー「調子乗るなよ！」

ダ「ドンマイ。」（微笑）

ドー「う・・・。」

ダルメシアン、笑ってないか？微妙に。なんか勝ち誇った顔でもあるけど。

オ「決まりだな。一年後には、ダルメシアンの専属海兵だ。」

「分かった。」

そういえば、

「ファール！ニロ！お前らはどこ？」

ファ「俺はガープ中将。」

ニ「俺は青雉大将。」

「へ～頑張れよ。なんかそこ嫌な予感がするからな。」

ファ「え！？」

「俺の予感はほとんど的中する。」

ニ「えー！？でも大丈夫だよ！！」

「なら、良いけど。」

まあ、卒業後の初回の専属上司が決まり、階級が決まった。

8　今後について（後書き）

疲れたー。
こんな感じです。
次は・・・・・なんだっけ？次回は今日か明日更新。

9　複数系鬼道成功

～1時間後～
ファ「あーすごいね！」
「あ、俺もビックリさ。歴代の一番は毎回曹長からだからな。」
ニ「それより2つ上がったんだね！」
「そうみたいだ。」
ガ「ファール！ニロ！櫻井！」
「んあ？」
ファ「ガープ中将！卒業後よろしくお願いします！」
ガ「よろしくじゃ！それでの！今から、わしら中将の部下全員集めて、超大規模鍛錬を行うのじゃが行くか？」
ファ＆ニ「「行きます！」」
ガ「そうか。なら早くいつもの場所での！」
ガープはそこに向かっていった。
それだったんだな。他の中将達と海兵達がいつの間にか居なくなっ

てたし。

ファ「海！俺ら先に行くからな！剃！」シュン

ニ「剃！」シュン

あーあ。まあ、俺の方が速いし。

「瞬歩」

シュンッ

＝大鍛錬場＝

ここはいつもと同じ場所だが、高さが調整されていた。

シュンッ、スタッ

「ふう。」

全員「「「「「「！？」」」」」」

シュン

シュン

ファ「あれ！？」

ニ「え！？」

「あ、これは“瞬歩”。」

ファ「なんでそんなに速いの！？」

「秘密。」

ニ「えーーーー！！！！」

「なあ、これって俺何すれば？」

ダ「こっち来い。」

「おう。」

ガ「ニロ。ファール。こっちへ来るんじゃ！」

ファ「はい！」

ニ「はい！」

ダ「海。って、呼んで良いか？」

「ああ。」

ダ「海。俺の部下と手合わせしろ。」

「全員でかかって来い。まあ、すぐ終わるけど。」

ダ「はあ？」

「ここに居る全員！ニロとファールも含めてだ！全員で俺に懸かって来い！！」

ニ「海？」

モ「正気か！？」

「相手してやる！勝つ自信はある！」

ダ「何言ってんだ？」

「・・・どんなに多くても一瞬で終わると思う。」

ダ「へえ。じゃあ、５分後に行くぞ？」

「ああ。どっからでも来い。手加減は無しだ。基本で行くからこっちは。」

ファ「何がしたいの？」

「限界を試したいんだ。」

ファ「あ、そういう事か。」

「5分後だ。」

鬼道の限界を試したかった。俺は零番隊長。尸魂界(ソウルサエティ)では試す事はできない。限界は最初の“一”から。今から行おうとしてるのは、『縛道の一、塞』これだ。

それを今からその複数の人数に向けて行う。

～5分後～

ダ「本当に行くぞ！お前ら行くぞ！」

ウオオオオオオオオオ！！！！！！！！！

叫びながら来るなよ。五月蝿い。おお、さすがだ。剃使ってる奴も居る。

さて行きますか。

「『複数系縛道の一、塞』！！！」

ダ「うっ・・・。」

モ「なんだこの金縛り・・・ではないが！」

ファ「あああああ！！！！」

ニ「痛い！」

コ「なんですか、これ！」

へ「まったく解けないぞ。」

「ふう、成功。（解け）」

ダ「はあ、開放された。」

モ「はあ。」

ファ「やっぱり、勝てないよ。」

ニ「今更かよ。」

コ「はあ。やっとだあ。」

へ「なんなんだ？」

「どうも。」

ダ「ああ。確かに、勝てないな。」

「ああ。ん？」

ダ「どうした？」

ピーーーーーーーーーー！！！！

「あ、これ虚発見のサイレン。抜けるよ。」

ダ「ああ。どこだ？」

ピーーーピーーーーピーピーピーピーーピーー

ダ「増えた？」

「そうだな。だが全て違うところだ。ここは影響が無い。行ってくる。」

ダ「おお。」

シュンッ

ファ「相変わらず速い・・・・。」

１０　シャボンディ諸島４６番ＧＲのボスと対決

ここはシャボンディ諸島。

＝４６番ＧＲ＝

４６番ＧＲは、無法地帯。そして、海賊の集まり場所にもなっている。が・・・・

グオオオ！！

虚も集まってしまうようだ。

「ちっ。なんでこんな無法地帯に。」

『クワセロ・・・・』

「ん？大群？あ、そんなに多くないな。７体。全部ここに集まってきたか。」

『死神ーー！！！！ソノタマシイクワセローー！！！』

「残念。俺は他の死神と比べるなよ。」

「その衝撃は雷より竜巻よりも強し。“雷竜巻”」

始解はしていない。

雷と同じくらいの電圧を縛った竜巻が虚に襲う。

ギャアアア！！！・・・・・・・スーーーッ

「フンッ。雑魚が。」

??「誰だ?貴様、俺の縄張りに入るとはな。いい度胸してるではないか。ハハハ。」

「誰だ。」

??「俺はジャッキー。この４６番ＧＲのボスさ。」

「海賊か?」

ジ「世間では、そう言われてるが。今は元海賊でここのボスだ。」

「あんまり変わらないだろうが。」

ジ「ふん。貴様も名乗れ。」

「俺は櫻井　海。」

ジ「そうか。海。手下に入らないか?」

「断る。俺は現在海軍士官学生。来年は少尉だ。」

ジ「ほう。海軍さんか。じゃあ、相手してもらうか。」

「手下も、か?」

ジ「当たり前だ。テメェら!出て来い!こいつに向かって存分に暴

れろ！」

ウオオオオオオ！！！！！！！！

「うっせえな。ったく、雑魚が。」

ジ「ふん。数は多いからな。」

だいたい、２００人ぐらい居る。でも海兵より少ない。簡単だ。鬼道でいこう。

『複数系鬼道、縛道の一、塞』

ギャアアアアーーーーー！！！！！

ジ「何！？」

「俺をなめない方が良いぜ？」

ジ「貴様ーーー！！！！おらあああ！！！！」

「ずいぶんと間違った使い方をしてるな。」

刀を振り回してる。

ジ「うるせえ！今は貴様を殺すのみ！」

「あ、お前懸賞金は？」

ジ「二億５０００万だ！」

「へ～、意外と高いんだね。でも、残念お前は負ける。」

ジ「誰にだ！」

「俺に。」

ジ「やってみろお！」

「『縛道の九、撃』　『破道の十一、綴雷電』」

まず、ジャッキーを赤い光で縛って、綴雷電を撃つ。

ジ「うがああ！！！」

「だから、言っただろう？まあ、海軍本部に戻るからさ。連れて行くよ。」

あ、でもこいつらどうしよう。あ・・・

（青龍！）

（なんだ。）

（こいつら、海軍本部に連れて行くから、手伝って？）

（分かった。）

青龍が刀でもなく人でもなく龍になった。

青「これで良いか？」

「ああ。俺も乗ろう。よっ。」

青「しっかり捕まれよ。」

「おお。」

角を持つ。

青「角？」

「え？駄目？」

青「いや、駄目ではないが。（角は敏感なんだよ。海。）」

「行け。」

青「お、おう。」

＝海軍本部＝

海軍本部に無事に着いた。

兵「なんじゃこりゃあああ！！！」

「青龍。いつもは斬魄刀だが。おい、戻れ。」

シュルルル

青龍が元の形になる。

兵「なっ！そいつは・・・・。」

ファ「あ！戻って来たあ！」

「ファール、五月蝿い。」

ファ「ええ！？酷っ！！」

「ジャッキー。懸賞金２億５０００万Ｂ。シャボンディ諸島の４６番ＧＲのボスらしい。他の奴らはその手下だ。」

ニ「ええ！？学生なのに億越え捕まえっちゃったの！？」

「お前らいちいちうるせえ。」

ファ「あ、ごめん。」

しかし、どうやって懸賞金決めてんだ。でたらめではないのか？アスクにでも聞いてみるか。

１０　シャボンディ諸島４６番ＧＲのボスと対決（後書き）

まあ、簡単に判決がきまりましたー。

１１　残り１ヶ月にサバイバル競争修学旅行決定

ここは医療施設。

「アスク～居るか～？」

ア「大声出すな。ここは医療施設だぞ？」

そうだった。ここは医療施設だったね。てかさっき自分で言ってた・・・（笑）

ア「で、なんだ？」

「医療とまったく関係ないけど、懸賞金ってどう決めてるの？」

ア「え？なんでそんなことをいきなり？」

「今日さ、“剣振り”のジャッキー捕まえたんだよ。で、あまりにも弱かったからさ。」

ア「（そんなに弱くないけどな）報告書で決まるよ。」

報告書かよ。基準無いじゃねえか。

「でも、最終的には？」

ア「最終的には会議だな。だから大海賊時代になってから会議が増えてる。」

「へ～、でも実際でたらめだと思う。なんでコイツがこんなに高い

んだ？っていうのがたまにあるし。」

ア「たしかに。」

「まあ、ありがと！」

ア「ああ。（海が報告書書いたら懸賞金は上がりにくくなるな。）」

それから約１１ヶ月。現在３月。

そして、先生から発表があり、

「今日から１ヶ月サバイバル競争修学旅行を行います。ペアを組んでも組まなくても良いけどこれは、組んだ場合結果を人数で割る事になるので組まない事を薦めます。この結果は卒業後の階級に影響が出ます。仮で決まってる３人も上下するかもしれないので気をつけるように。以上！それでは開始！」

・・・・・・どうやらこの一ヶ月ずっとこの内容のようだ。正直言ってつまんねー。

ファ「海？行かないの？」

「あ?あ、お前はどこ行くの?」

ファ「え?ローグタウン。ニロと偶然一緒だったけど?」

「俺は・・・・・・なんなんだよ!!」

周りがこっち見てるんだけど・・・・。

先「どこに行くんだい?」

「シャボンディ諸島。そこの方が暇じゃないと思って。虚も集まり易いから。」

ファ「そんな理由なんだね。」

「ああ、俺はもう行くから。」

ファ「うん!じゃあね!」

「ああ。」

シュンッ

ファ「え?普通瞬歩で行く???」

１１　残り１ヶ月にサバイバル競争修学旅行決定（後書き）

ごめんなさーい！短すぎましたあーーー！！！！
次回は今日更新するようにしますのでーーー！！！！
見捨てないでーーーー！！！！あーーー！！！！

１２　結果発表

あー。またシャボンディ諸島に来ちゃった・・・・。

まあ、標的が多いからちょっと楽しい。・・・あー問題児になっちゃったかな？でもいいや。早速海賊捕まえに行こう！

＝２５番ＧＲ＝

ここは住居街だ。

キンッ、キンッ！

金属音？刀か。

賊「ここで暴れて懸賞金を上げろーー！！」

ウオオオオオオ！！！

大勢の人だかりがあるのに金属音しか聞えない所で

「うるせー。」

と、言った。そしたら、

『！？誰だ！！』

反応しやがった。・・・・しない方が変か。

「俺だよ。てか道の邪魔すんな。『破道の一、塞』」

本当に邪魔。

こいつらどうしよ。まあ、いいか引きずろう！

こんな事を繰り返すこと３０日。
海軍本部に戻った。

セ「これから結果発表をする！・・・・」

会話はめんどうだから、ここが言っておこう。

第三位　ニロ　１５組

第二位　ファール　２８組

第一位　俺　５９組

階級は、

ニロは准尉。ファールも准尉。で、俺なんだが・・・・何故か大尉から。

仮より二階級も昇格したのだ。まあ、一ヶ月で５９組も捕まえる奴居ないから納得はできるよ！？

でもさ。いきなり卒業後大尉は無いと思うがな。まあ、明日から海兵だ。

12　結果発表（後書き）

今回の方が短い！？

１３　遅刻

翌日。
ピピピピピピピピピピピピピピピピッ！！！
「うるせえーーーー！！！！」
あ・・・・・朝だ。
時刻は？・・・・・あああああああああ！！！！１０時だあああああ！
！！やべええーー！！
瞬歩！
シュンッ

その頃、港では。
ファ「まだ、来ないの？海。」
ニ「みたいだな。」
「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
ファ「なあ、今誰かの声聞えなかったか？」
ニ「聞えた。」
ダ「誰の声だ？」

ガ「そんなの知らん！青二才！」

ク「知りませんよ。」

ア「なんとなく・・・・じゃないけど分かってる。」

ファ「アスク少将！誰なんですか？」

ア「海だ。」

「あああああああああああああ！！！！！！！」

スタッ

「あああああああああーーーーーあ・・あ・・。疲れた・・・・。」

ファ「遅すぎだよ。」

「ごめん！寝てた！」

ニ「えええ！！！寝てたのー！？」

「あはは！」

ガ「ぶわっはっはっは！相変わらずじゃの～！」

ニ「あれれ？コートは？」

「コート？こいつとかが着てる？？」

ファ「そうそう！」

ダ「ほら、海のコート。特別なコートさ。科学部隊が1年掛けて造ったコートだ。海が想像した色、形、長さなどなどを実現に移す物だ。大丈夫、機械では無い。」

「ふう。（じゃあ、この隊長服と同じにして、文字は正義で。）」

すると変わっていく。

ダ「！？」

ニ「わー！！」

ファ「おお！！！」

「すごっ・・・・・。」

ダ「ふむ。ガープさんと青雉大将殿は？」

ク&ガ「「仕事。」」

「あっそ。」

ク「ねえ、俺一応大将。三大将の内の一人。」

「信号機か！？」

ク「いや・・・まあ・・・うん・・・。」

ニ「はっきりしてください！」

ク「あーニロ准尉。」

ニ「はい？」

ク「早く乗りなさい。」

ニ「はっ！」

ガ「ファール！行くぞい！」

ファ「はい！」

ダ「俺達も行くか。ほら行くぞ。」

「あー待てよ！」

13　遅刻（後書き）

はあ。今日死んだ。テストが・・・・・orz。

１４　あの海兵、書類に埋まってるし（笑）

＝ダルメシアンの職務室＝

ダ「あ、海。今日から大掃除だ。」

「大掃除？」

ダ「ああ。あまりにも酷いからな。」

「どんな状況なんだよ・・・・。」

ダ「まあ、見たら分かるさ。」（苦笑）

苦笑いするほど！？おいおいおいおいおいおいおいおいおい。大丈夫なのか海軍本部。

ダ「掃除・・・・・しに行くぞ。」

「なんだよその間！」

スタスタと歩いていく俺の上司。

「ああ！！逃げた！」

＝資料室＝
ここは資料室。棚に入りきらなくて溢れている資料とかが海兵達を襲う。
「うわー。」
つい、この状況を見て言ってしまった。
そして、この言葉に海兵達が反応した。
海兵「あ！ダルメシアン中将！海大尉！」
「あれ？知ってんの？」
ダ「昨日、発表したからな。」
「あーなるほど。」
で、あの海兵大丈夫なのか？将校だよな？てか書類に埋もれてるし（笑）
ダ「何笑ってるんだ？」
「あ、いやー」（笑）
その海兵の所に行く。笑いながら。
ガサガサ
将校「ぷはっ。はぁ・・・・！！あ！ありがとう！君は・・・・海大尉かな？」

「ああ。」

??「ふふっ、さっき笑われてたわよ?」

「!!・・・ジュリ大佐殿!!」

ジュ「フフッ。そう、私はジュリ。このコはバン少佐よ。私の後輩よ。」

「あ、どうも。海です。櫻井海。」

ジュ「噂の海大尉ね。私は黄猿大将の部下よ。」

「噂?」

バ「残り一ヶ月の間に海賊を59組捕まえて予定より2階級上がったっていう噂。」

ジュ「私も、ダルメシアン中将部隊と一緒にこの資料室の大掃除係なの。と言っても元々この部隊から今の部隊に移ったから私。」

「へ〜、じゃあ、違和感とか無いの?」

ジュ「そうね。無いわ。」

ダ「こら、話して良いなんて言ってないぞ。」

バ「あ、すみません。」

ジュ「すいません。」

「・・・。（違和感くらいあるんじゃね？まあ、変わってなかったら無いかもな。）」

ダ「海？」

「（俺は・・・・あ、部下居ないじゃん！）」

バ「何か言えよ。」

「（あはは！俺バカだ！）」

ダ「海？何か言う事あるだろ？」

「え？何どうしたの？」

ズルッ

その場に居た俺以外の全海兵がこけた。

ダ「お前は・・・・まあ、いい。」

いや、だから何だし！

１４　あの海兵、書類に埋まってるし（笑）（後書き）

そういえば、オリキャラたくさん出てたな。設定でも書くか。

15　オリキャラ設定

【名前】
ファール

【性別】
男

【職業】
（予定）海軍本部軍曹→海軍本部准尉。

【所属部隊】
ガープ中将専属部隊

【出身地】
西の海デスケ島

【イメージカラー】
オレンジ

【年齢】
１６歳。

【容姿】
海兵服（下）とTシャツ（ほとんどオレンジ）

【戦い方】
・六式を使う。（無事に六式を一応習得。完璧にマスターしてはいない。）
・日本刀（大業物２１工の一つ）（名前不明）

【覇気】
まだ何も覚醒していない。

【弱点】
・虫
・気温が３０度を下回った日。

【名前】
ニロ

【性別】
男

【職業】
（予定）海軍本部軍曹→海軍本部准尉

【所属部隊】
青雉大将専属部隊（弱点をなくす為）

【出身地】
南の海ルキナ島

【イメージカラー】
黄色

【容姿】
コビーと似たような服装。

【年齢】
１６歳

【戦い方】
洋刀（1刀）

【覇気】

まだ覚醒していない。

【弱点】
・気温が３５度を下回った日。（結構暖かい気候の島で生まれた為。）
・氷

【名前】
バン

【性別】
男

【職業】
海軍本部少佐（部隊の副官の副官）

【所属部隊】
ダルメシアン中将専属部隊

【出身地】
西の海トアス島

【イメージカラー】
藍色

【容姿】
将校限定コートに藍色のスーツ。

【年齢】
２５歳

【戦い方】
・悪魔の実の能力
・六式

【能力】
動物系ネコネコの実　モデル“ジャガー”

【覇気】
見聞色と武装色の使い手。武装色が得意。

【弱点】
・水
・またたび（好物だが、すぐに酔ってしまい仕事ができない為。）
・気温３０度を下回った日

【名前】
ジュリ

【性別】
女

【職業】
海軍本部大佐

【所属部隊】
ダルメシアン中将専属部隊→黄猿大将専属部隊

【出身地】
東の海ホルドフ島

【イメージカラー】
薄ピンク

【容姿】
将校限定コートに濃いピンク色のスーツ

【年齢】
３３歳

【戦い方】
・悪魔の実の能力
・六式

【能力】
動物系ヘビヘビの実　モデル“マムシ”

【覇気】
見聞色と武装色の使い手。見聞色が得意。

【弱点】
・水
・気温が３０度を下回った日。
・３大将と元帥。（ジュリ曰く、なんか全体が嫌い。）

こんな感じです。

16　空間瞬間移動ジッパー

「いや、だからなんなんだよ！」

ダ「気にするな。」

とか言いながら俺の頭を撫でる。

バ「あの、この余った書類どうしましょうか。」

ダ「・・・・・・。」

バ「中将？」

ダ「分からん。」

ジュ「分からないの！？」

ダ「何か方法はあるのか？」

バ＆ジュ「「うっ・・・・。」」

「おい、いい加減に手を離せ！」

ダ「駄目だ。」

「はぁ。・・・・・・手段はあるぞ。」

バ「え！？あるの！？」

「ああ。“リサイクル”だ。それを細かく切り刻んで水を入れ加熱。インクは水溶性だから少し紙の色が変わるのみだから気にしなくていい。その加熱した紙水をもう一回紙にする。この方法だ。」

ジュ「何それ。結構面倒じゃないの。」

「俺が工場を所有しているからその工場を使えばいい。俺が工場に持ってい・・・・あ、あれ使えばいいか。」

ダ「あれ？」

そう言いながらも、撫でるのをやめない上司。気持ち良いから許すが。

「これだ。『空間瞬間移動ジッパー』」

ジィーーーー

ダ「！？」

バ「！？」

ジュ「！？」

開いたら工場内が見えた。この工場は製紙工場。隣にも工場はたくさんある。

俺は海兵達の3割を貸してもらい処分が決まった書類をシュレッターに入れていく。
上司と海兵達は資料室でまだ処分しても良い書類を捜している。
決まった書類はまた工場に持っていく作業を繰り返して、

～1時間後～
来たときにあった書類が4分の1までに減った。物凄い変化だ。
ダ「うむ。海のおかげだな。」
「あ、俺なんだ。」
ジュ「手段を教えてくれたじゃない。」
「あ、そうか。」
ダ「お前ら知ってるか？一番部屋が多く綺麗にできたらボーナス＋給料1．3倍になるって。これはな、部隊で競争する物だ。」
海兵「本当ですか！？」
「本当だよ。盗み聞きで聞いた。」
ダ「おい・・・・。」（汗）
「よーし！次行こう！！」グイグイ

ダ「ああ。・・・スーツを引っ張るな！！！」

「行こうよ！」

ダ「（うっ・・・・それ反則だぞ。）」

「早く～！！」

バ「あはは、勝てないみたいですね。」

ジュ「まあ、海には勝てないよ。」

バ「そうですね。」

１６　空間瞬間移動ジッパー（後書き）

ダルメシアンは主人公に弱いです。

17　次（最後）の場所はオリス広場

「次は・・・・ええ！？広場！？」

ダ「何！？」

「まあ、良いんじゃね？ポイントも多いし。俺、広いところを掃除するのは慣れてる。」

隊舎がデカイからな。

ダ「分かった。広場へ行こう。」

＝広場＝

ダ「そうするつもりだ？」

「これだ！」

バ「何それ。」

「『高圧洗浄機』」

（余談）日本橋もこれで綺麗になったよ。

ジュ「あ、私戻るわ。」

「おう。」

ジュ「じゃあね～。」

「さてと、あーバン～。」

バ「はい？」

「このホースを海に！」

バ「はぁ。」

ボチャ

「スイッチオン！」

あ、もちろん洗剤で広場が泡だらけだよ？

プシャアアア

バ「お～お～お～！綺麗なってく～！」

「おりゃあ！」

ダ「なんだこの差は。」

綺麗になった所とその前の所の綺麗差が酷い。

「中将～！！」

ダ「名前で良い。」

「ダルメシアン～！」

ダ「それで良い。」

「これ終わったら、報告しに行こ～！」

ダ「時間だもんな。」

「おりゃあ～！！」

プシャアアァ・・・・・・キュッ

「うっひょーーーー！！！綺麗になったあああ！！！！！」

ビクリ

ダ「いきなり大声出すんじゃない！」

バ「何がうっひょーですか！！吃驚しましたよ！！」

「うぅ・・・・・ごめんなさい。」

海兵「大尉が・・・・」

海兵「怒られて、」

海兵「「「しょんぼりしてる。」」」

海兵「いつもは陽気か強いのに。」

海兵「でもさ、大尉もこういう所があるんだな。」

海兵「意外だよな〜。」

ダ「行くぞ。」わしゃわしゃ

海兵「なんで、」

海兵「大尉の頭を、」

海兵「「「撫でてるの？」」」

海兵「いつの間に。」

海兵「でも、中将が怒らなくなったよな。」

海兵「これは大尉のおかげか。」

海兵「大尉って、おみくじで決めたもんな。」

海兵「部隊をな。」

海兵「すごい確立でここを当てたって事だよな。」

海兵「俺ら、運ついてる！」

海兵「でも、毎年くじ引きだってさ。」

海兵「来年も祈ろうぜ！」

海兵「そうだな！」

いや、くじ引きだから。無理だって。2年連続はできるかもしれないけどさ。3年連続とかは奇跡だぜ？無理だって。

バ「おら！置いて行くぞ！」

海兵「あ！待ってください～！！」

１７　次（最後）の場所はオリス広場（後書き）

日本橋の話は本当です。

18　結果発表の司会役

＝広場＝

セ「結果を発表する。」

「てか、そこ緊張するか？」

バ「しますよ！」

セ「・・・・・誰か発表してくれないか？実はまだ見ていない。」

「は？何で？」

バ「ばっ！お前！元帥にそんな口！」

セ「良い。実は私も参加していてな。」

「じゃあ、俺発表するー！！」

セ「頼んだ。」

「準備ＯＫ？」

バ「お・・おう。」

「そんじゃ！結果発表～～～！！！」

イエーーーイ！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「何でそんなにシーンとするねん！！」

バ「良いから良いから！早く！」

「うーん。あ、開けよ。」

バ「開けてねえのかよ！！」バシッ

「イテー。」

「はい。第一位！１００ｐｔの、」

ドキドキ

「あ。俺らの部隊だ。」

バ「やったあああ！！！」

海兵達「「「「よっしゃあああ！！！」」」」

「えーと、掃除した場所は、オリス広場と資料室。どちらもポイントが高いです。両方とも満点！イエーイ！」

バ「マジ？！」

「お前キャラ壊れてるよ。次、第二位！９６ｐｔの、」

海兵「どこだ？」

「モモンガ中将部隊！」

海兵達「「「「うおおおお！！！！！！」」」」」

「場所、会議室と第１～３地区。会議室はポイントが高く満点。おめでとう！」

モ「よかった。」

オ「負けないからな。」

青「俺らも負けないよ。」

「ちょっと、言い方変えま～す！」

黄「早くゥ～。」

「第三位！場所、１～２階。９３ｐｔのドーベルマン中将部隊！おめでとう！」

ドー「こっちが3位だ。オニグモ勝ったぞ。」

オ「ふん。次は貰う。」

「第四位！場所、３～４階。９０ｐｔのオニグモ中将部隊！おめで

とう！」

オ「ほらな。」

青「えー俺らは？」

「同じく四位！場所、食堂全体。９０ｐｔのつる中将部隊！おめでとう！」

つ「ひよっこ共には勝てると思ったんだがね。」

青「てか俺らスルー！？」

「大将以上はトップ１０に入ってません。」

青「ええええええええええええ！！！！」

「第六位！あ、３部隊同時入賞！場所、５～６階のスモーカー大佐部隊！議事の間のガープ中将部隊！港のヤマカジ中将部隊！３部隊とも８７ｐｔ！おめでとう！」

ヒ「スモーカー君に負けた。ヒナ悔しい。」

ス「ふん。」

ガ「ぶわっはっはっは！お前はいつまでも青二才じゃの！」

青「ガープさん・・・・。」

「給料アップは第十位まで！最後の第十位！」

ヒ「私の部隊よ。」

ジャ「本当ですか！？」

「違うよ。」

ヒ「私達は？」

「第十三位で７５ｐｔだけど。」

青「じゃあ俺らは？」

「第十位！場所、第７～８地区。８５ｐｔのラクロワ中将部隊！おめでとう！」

ラ「ふう。」

ロ「ずるいぞ。」

ラ「これが結果だ。」

「ちなみに大将部隊は、第十九位の黄猿部隊。第二十三位の赤犬部隊。第二十五位の青雉部隊でーす！」

青「全然駄目だ。」

ロ「ここは？」

「オマケ的に第十五位までさっきと同じように発表します！」

海兵「イエーイ！」

「第十一位！場所、５～６地区。８３ｐｔのロンズ中将部隊！おめでとう！」

ロ「２ｐｔ差か・・。」

「第十二位！場所、３～４地区。８０ｐｔのストロベリー中将部隊！・・・ええ！？・・・意外。」（笑）

スト「酷いぞ。」

「あはは！ごめん。えーと第十三位はヒナ大佐部隊！場所、１～２地区で７５ｐｔ。」

ヒ「・・・・。」

「第十四位は４部隊が同時入賞！」

カ「どこだ？」

「場所は省略します。えーと第十四位は７４ｐｔ！カイゼルヒゲ中将部隊とコーミル中将部隊とＴボーン大佐部隊とユキムラ少将部隊！おめでとう！」

あ？何々？「ユキムラ少将って誰ですか？」って？

あー、異名が“千人斬り”。

『これじゃあ、分からないので簡単に説明。頂上戦争で海賊からコビーを守った将校です。斬られましたが。ｂｙ作者』

だってー。

「以上！第１～１９位でしたー！」

バ「お前、司会得意？」

「楽しい～！！」

バ「今更？」

「でもさ、優勝したね！！」

バ「ああ。（こいつ、敬語忘れてないか？）」

ダ「ほとんど海がこなした気がするが。」わしゃわしゃ

バ「中将？」

ダ「罰ゲームなんだよ。だから満喫している。」

バ「あ～！」

「でも気持ち良いから。」

バ「・・・・・・。（変な罰ゲームだな。）」

18　結果発表の司会役（後書き）

優勝ーーー！！！！

1～2地区は2部隊居ました設定。

１９　一応、潜水士（前書き）

なんか久しぶりに書いた気分。

１９　一応、潜水士

あー・・・・・あー・・・・・あー・・・・マイクのテスト中ーー。はい。嘘です。

昨日優勝して、ここがボーナス＋給料１．３倍になり、めでたしめでたし。

そういえば海軍本部では、いろんな大会があるらしいよ？昨日の大会は今年から始まった新しい大会だったんだ。

でもさ、治安部隊に大会あんの？しかもここは軍だし。軍でいろんな大会が１年に何回も開催されるってどういう意味さ。普通に考えておかしいよな？でも毎年恒例で行われていて伝統みたいだよ？

まあ、こういう軍もあるってことだ。

将校「おい！聞いてるのか！」

「んあ？何だよ。」

いきなり大声呼ぶな！

将校「ったく。ちゃんと聞け。今日から、水泳が始まる。だから第一水泳室へ行け。地下にあるからな！水着は無くても良い。あった方が良いと思うがな。とにかく行け。」

「ほ～い。」

あーどうしよ。一応持ってるけど。でも、今日からって事は？何回もあるって事だよね？じゃあ、今日は水着にするか。

＝第一水泳室＝

の着替え室にいる。将校用着替え室に居るんだけどさ。上層部用、将官用、佐官用、尉官用ってあるんだけどさ、俺、今、上層部用に居るんだよ。

「何で此処？」

ダ「別に良いだろ。」

そう、俺の上司が突然、尉官用の着替え室に来て俺を誘拐したんだよ！酷くね！？

ダ「誘拐ではない。」

「勝手に文を見るな。」

ダ「うるさい。さっさと着替えろ。」

「俺、脱ぐだけだから。」

ダ「・・・・・着てたのか。」

「おう。なんとなく予想は出来た。」

モ「・・・予想は外れる物だぞ？」

「当たる人も居るんだよ。」

モ「・・・・・。」

「あ、タオル。・・・・・バスタオル並にでかくね？これ。」

ダ「海の場合、布団並だよな。」

「うるせー！」

あった。タオルじゃないな。あの水を良く吸うタオルみたいな物だけど名前忘れた。

ザワザワザワザワザザワッ

「なんかザワザワしてるー。」

ダ「行くぞ。」

「おう。」

タオルとか持ってレッツゴー！

海兵「うお！深い！」

海兵「大丈夫なのか・・・・。」

モ「海、水泳は得意か？」

「おう！得意だぞ！」

ダ「てか、海。腹筋割れてるんだな。なんか意外だ。」

「割れてて何が悪い！」

モ「まあまあ、落ち着け。」

「おおーー！！広い！」

ラ「当たり前だろ。」

「ん？あー！そっか！」

巨人族が居るのを忘れてた・・・・。（汗）

セ「整列しろ！」

整列をする。上層部の列に居るんだけど・・・・。（苦笑）

セ「今日からここは毎日使っても良い。と言うより、毎日あるから忘れるな！水深２８０Ｍあるから溺れる自信がある奴、能力者の奴は浮き輪を用意・・・・事前に用意してたか。まあいい。もう始めて良いぞ。何をしても良い。ちなみに底には海楼石がある。取ってみろ。これは上級者しかできない。生身で出来る訳が無い。巨人族でも届かない所にあるからな。それでは開始。」

「よーし！入るか！」

底に行きたい！だって、俺、潜水能力が凄いんだよ！１時間潜れる時があるし、見えるし。生まれつきなんだ。凄過ぎ！

・・・・・・・・・・・・・・。

「え？入らないの？」

海兵「だって・・・・なんか・・・・・・。」

海兵「深いし。」

「海兵だろ？海の方が泳ぎ難いんだぜ？だから今泳げないままで海に放り出されたら死ぬだけだぜ？」

本当の事を言った。

海兵「よし！行くぞーー！！！！」

バシャアアン

「おーおーおー！入ってくー！」

バ「あ、ここに居たか。」

「あはは、浮き輪で浮くんだ～！」

ダ&バ「「うるさい！」」

「ふ～ん。じゃ！」

バ「え？」

タッタッタッタッ・・・・・・バシャ

バ「ああ！！飛び込んだ！」

ゴボゴボゴボゴボ

おー、深いー。えーと？今は？・・・・水深５０Ｍ・・・・え？あと５倍あんの？深くね？

～6分後～

おー、底が見えた。

うん？あれが、海楼石？なんだ見えるじゃん。

よし、3つ持って上がろ～！

海兵「ダルメシアン中将！」

ダ「どうした？」

相変わらず浮き輪に掴まって浮かんでいる。

海兵「海大尉が上がってきません！」

ダ「いや、海なら大丈夫だ。」

海兵「いや、あの、・・・はい。」

ブクブク

海兵「泡のリング！？」

海兵「おお！誰がやってんの？」

海兵「知らねえよ。」

ブクブクブクブク・・・・・

「ぷはっ！」

海兵「ああ！生きてた！」

ダ「だろ？」

「おーい！」

セ「なんだ。」

「じゃーん！」

大仏に海楼石を３つ見せる。

セ「なっ！」

「俺、一応潜水士だよ？」

ダ「・・・・資格持ちか。」

「おう！生身でもＯＫ！！えへへっ＾＾」

海兵「・・・・・・。」

海兵「・・・・・・。」

海兵「・・・・・・・。」

唖然とする海兵達。

バ「お前、得意分野だったのか。」

「おう。で、今日さ、水着にしようかしないかですごく迷ってた・・・」（苦笑）

バ「お前、私服でもＯＫなのか？」

「いつもほとんど私服で仕事するし。」

バ「・・・・・・スゲエ。」

俺、苦手分野より得意分野の方が多いもん。どんどん発揮して行こうと思う。

１９　一応、潜水士（後書き）

昨日はなんか更新できませんでした。

２０　黒鷹封印（前書き）

会話多し。

２０　黒鷹封印

＝精神世界＝

「黒鷹、ちょっと重要な事なんだけど。」

「？」

「重大な事が無く使わない限り、黒鷹を封印する。」

「！？」

「お前は能力が異常だからな。」

「・・・・・・・。」

「銀虎は電気。青龍は水。」

「それが？」

「この２つは身近にあるものだ。」

「じゃあ、」

「黒鷹は“闇”。普通に・・・じゃなくても身近にあるものではない。」

「・・・・・。」

「悲しげな顔をするな。」

「どういう意味だ！！海！」

「重大な事故とか無理だったら黒鷹を呼ぶ。」

「会えないのか！！」

「いや、俺が意識すれば会話は出来る。」

「でも・・・。」

「ごめん。でも、使うから。」

「・・・。」

「お願いだ。使いすぎると元の世界は大丈夫だったけど、」

「けど？」

「此処の世界の場合、世界に異常が出る可能性がある。」

「！？」

「さっきも言った通り、黒鷹の能力は“闇”。」

「・・・。」

「闇はどういう性質を持っている？」

「・・・吸う能力と無制限。」

「そうだ。もしも、俺か黒鷹どっちかが暴走した場合、此処の世界が消滅するかもしれない。」

「なっ！！」

「だから、封印する事を許可してくれ。頼む！」

「・・・・・・・・・・・・・・・分かった。許可する。」

「ありがとう。」

「その代わり、週に一回は会いに来てくれ。」

「分かった。」

「以上だ。」

「その条件だけで良いのか？」

「ああ。もう時間ではないのか？いい加減に戻った方が良いぞ？」

「あ！そうだった！本当にありがとう！黒鷹！」

「ああ。達者でな。」

結構危ない黒鷹を封印することに成功。

21　シャボンディ諸島半年滞在決まる

えーと、黒鷹封印して、水泳授業的なことから一日が経ち、今、軍艦の中に居ます。

「何やってる。」

「げっ！ダル。」

「ダル？」

「言いにくいから。」

「それは本部では呼ぶなよ。」

「ＯＫ！」

「あと、部下の前でもな。」

「ＯＫ！」

「・・・・・・じゃあな。」

「・・・・・・おう。」

変な感じだったな。空間とかが。返事がおかしかったか？

「海。」

「あ、バン。」

「お前、この軍艦が何処に行くか知ってるか？」

「へ？」

「知らないみたいだな。行くのはシャボンディ諸島だ。」

「あそこ！？」

「ああ。部隊の入れ替え時期でな。次は僕らの部隊だからな。」

「はぁ。あの物騒な所に半年だろ？」

「よく知ってるな。」

「授業で教えて貰ったから。」

「なるほど。」

「しかし、あそこは虚も来てたから結界でも張ろうかな。」

「張ってくれ。」（汗）

「ああ。」（苦笑）

「バン少佐！海大尉！シャボンディ諸島に到着しました！」

「ご苦労、ジュームル伍長。」

「俺らも行くから先に行っといて。」

海兵が到着の知らせを報告してきた。そういえば俺、大尉だったな。

「行くぞ。海。」

「おう。」

駐屯地に入ると、部隊が待っていた。

「遅かったな。」

「はは・・・ごめん。」

「別に良い。」

「で、俺らは半年間ここに滞在だろ？」

「ああ。バン少佐が説明したか。」

「コクリ」

「ダルメシアン中将。僕らは、何をすれば。」

「まず、海は無法地帯だろ？」

「コクリ」

「バンは１～１０番ＧＲの巡回へ行け。部下を連れて行っても良い。最低限でな。」

「分かりました。」

「おれはシャボンディ諸島の駐屯地の総司令官だから、動けない。頼んだぞ。」

「「「「はっ！！！」」」」

今日から半年間、大忙しのシャボンディ諸島滞在記が始まる。

21　シャボンディ諸島半年滞在決まる（後書き）

次回から長編はじまります。

何話くらいが長編なんでしょうか？分かる人居ます？

一言欄に書いてくれたらうれしいです。自分は分からないので。

22　問題発生？

翌日。

まあ、昨日は何も問題が無かったからゆっくり出来たけど。俺は結界を張りに行ったが虚は居なくてゆっくり時間を掛けて諸島の全GRに張った。

『プルプルプル、ガチャ。』

「はい。シャボンディ諸島海軍駐在所です。」

バンが電話に出た。

『あ。人間屋（ヒューマンショップ）の経営者で司会者でもあるサクラです。』

「はぁ。」

『明日、天竜人が此処に来るのですが、ちょっと問題が発生しまして。』

そう、明日、此処に物凄い問題児もとい天竜人が来るのだ。此処の駐在所は嫌がられているが、その原因はこの問題児だ。我儘で奴隷好きで人間は自分達だけだとか言うし自分達が通る時は土下座？みたいな事をしないとか目の前に何かが通り過ぎると殺されるし。天竜人の中で少しマシな奴も居るがこの五つは変わらない。

「問題？」

『ええ。店にヒビが入りまして』

「バン。」

「ちょっと待ってください。・・・なんだ？」

「貸せ。」

「おう。」

「お前、司会者って言ったよな。」

『あ、はい。』

「経営者だろ？」

『はい。』

「そこの店の経営状態分かってるだろうが！」

『え？』

「莫大な利益持ってるだろうが！」

『え、それってつまり・・』

「そういう事は自分達で直せ！お前、利益が減ることが嫌なだけだろう？だったら、ここの駐在所の事も考えやがれ！」

『すみません。切ります。ガチャ』

「ったく。」

「・・・・・・・・・やりすぎじゃねえのか？」

「それくらい言わないと、俺らの精神が終わるわ！」

「まあ、そうだな。」

「そういえば、来た事あるのか？」

「いや、僕は無い。」

「僕は？」

「中将と大佐と今の一等兵の半分は来た事があるんだ。」

「へ～。」

「海。今、怒鳴ってたよな。」

「あ、中将。」

「・・・・・・・・・・・・・・。」

「相手は誰だ。」

「人間屋の司会者のサクラだ。」

「あ、あのクレーマーか。なら良い。」

「「クレーマー？」」

「前回来た時、もちろんあのクズも居たが、そのクズが帰って戻った時に・・・

＝ダル回想中＝

それは１１年前に戻る。当時は少将。

「シャンドエドブ、今日は大収穫アマスね。」

「ああ。デフジョヌ、その通りだえ。」

人間・魚人・人魚とかの奴隷が居て何が楽しいんだ。さっさと帰れ、クズ。

「そうだえ。良い事を思いついたえ！」

「何アマス？」

だいたい、クズが考える事は馬鹿馬鹿しい。

「わしらの息子、ヌクデイルが居るからわしらが頂点に立っている事を見せることだえ！」

「良い考えアマス。」

「？」

このクズ野郎！何考えていると思ったら！

「おい、そこの犬。」

「（犬じゃねえ！イヌイヌの実を食べて悪かったな！）何でしょう。」

「今から行くえ！」

「はぁ。」

ただの見せびらかしだった。さっさと帰れ！

「どうだったかえ？ヌクデイル？」

「よかったえ！」

「やっと言えるようになりましたアマスね。」

「そうだえ。帰るえ！」

やっと帰ったか。

戻った俺達はやっと開放された気分になった。

『プルプルプル、ガチャ。』

この電話に出なければ良かったと今思う。この相手はシャボンディ諸島で一番評判が悪いクレーマー男だったからだ。クレーマーは評判が悪いがこの男は比べ物にならないくらいだ。もちろんその情報は海軍にも知れ渡っている。情報を持っているとか頭が良い海賊は知っているようだが。

「はい。シャボンディ諸島海軍駐在所です。」

『あのですね。』

「はい。」

『何ですか！この状況は！』

「は？」

『は？じゃない！何で天竜人はもっと金を使わないんだ！』

意味分からない。何が言いたい。

「？」

『ったく、世界政府に言っとけ！もっと金を使えとな！』

「分かりました。」

『ガチャ』

「なんだ今のは。」

「ダルメシアン少将。」

「なんだジュリ中佐。」

「多分、諸島で一番評判が悪い、人間屋の司会者のサクラではないでしょうか？」

当時中佐のジュリが答えてくれた。

「誰だ。」

「サクラは自分達の利益しか考えない、天竜人みたいな奴です。」

「・・・。」

「よく貴族達が憧れる天竜人を尊敬していて、海軍・政府・海賊・市民なんて関係無いとか思ってるただのゴミです。」

「あー、あれか。」

「はい。」

＝回想終了＝

って感じだった。」

「ジュリ大佐も嫌だっただろうな。」

「誰でも嫌だろ。尊敬や憧れている馬鹿以外は。」

「だな。」

「明日は大変だぞ。」

「はぁ。結界壊そうかな。」

「ばっ、馬鹿！」

「冗談だっつーの。」

「はあ。」

「とにかく、明日の朝には今あるストレスを無くして来い！」

「「「「「「はっ！！！」」」」」」

明日、天竜人が来る。

22　問題発生？（後書き）

お久しぶりかな？まあ、よろしくー！

「何が？」ってツッコミ禁止！別に良いだろうが！

何か間違っていたらよろしくおねがいします。

ちなみにシャボンディ諸島の知識は薄いかも？

23　天竜人来る

それから一日が経ち、あの厄介なクズが訪問してくる日になった。

「中ーー将ーーー！！」

「なんだバン少佐。」

「あの厄介なクズが乗ってる政府の軍艦が来ましたーー！！！」

「早く言え。」

「今、来たんですから。」

「分かった。行くぞ。」

「はい。・・・海もだよ。」

「俺も！？」

「そうだよ。」

「・・・・」

「行きたくないのは分かってる。全員同じ気持ちだ。」

「分かった。」

「11年ぶりだえ！」

「（また、こいつか。）」

「「（誰？）」」

「さっさと行くえ！」

「そうアマス。」

「（気持ち悪い。）」コソコソ

「（ちょっと我慢しような海。）」コソコソ

「（分かった）」

「そこの海兵！何話しているアマス！」

「てか誰？」

「なっ！」ガーーーン

「（おいおい。）」

（ちょっと中断。時間が遅いので明日続きを更新します。）

23　天竜人来る（後書き）

もう、限界・・・・・ＺＺＺＺ

24　脅し

「私くしの名前を知らない下々民なんか見たこと無いアマス！」

（（あーあ。海、やっちゃったよ。））

何故か、上司とバン（バンも一応上司だが。）がやっちゃったよ、みたいな目で見てくる。え？何かしたか？

「いや、知らないから言っただけじゃねえかよ。」

「私の名前はデフジョヌアマス！」

「デブジョヌ？」

（（デブは無いだろ。））

「違うアマス！何がデブアマス！私くしは痩せているアマス！」

「いや、太ってるから。」

（（確かに。））

見た目で分かる。天竜人って全員では無いが、ほとんどが太ってる。半分くらいは肥満の奴だ。

「なっ！何なのこの下々民は！海兵クビアマス！」

「カタカナ多いな～。」
（（カタカナ？））
「カタカナアマス？」
「今の言葉とか。」
「・・・いい加減にして！」
「あ、あの変な3文字無くなった。」
「？」
「そんな感じの方がいいよ。」
「そう？」
「うん。」
（（なんか関係良くなってる？？））
「妻に何しているんだえ！」
「なんでもないわ。」
「どうしたんだえ！」
「？」

最後は、２人の息子な。

「何かしたか！この海兵！」

「ただ、あの三文字がなくなっただけで結構印象が変わる事を教えてあげただけだけど？」

「何！？」

「お前もその方がいいと思う。」

「嫌だぇ！」

「（破道系、弱雷撃）」

ビリビリビリビリッ！

「ぎゃあああ！！」

「・・・・・・。」

（（（（今、絶対になんかしただろ。））））

海兵達から非難と尊敬の眼差しが・・・。

「い、今、何をした！」

「何もしていないが。」

（（（（いや、確実にしただろ！））））

証拠はある。
海兵達が居る所からじゃないと電気が見えないが、海以外の海兵は全員見ている為放った事は本当だ。

「絶対にしたえ！」

「だから、何もしていないって言っただろ。」ギロリ

「ヒィィ！」

「さっさと用事を済ませ。」

「分かった、分かったえ！行くえ！」

「・・・・・。」

（（（（（（（・・・・・・・やりすぎ。））））））

天竜人が大っ嫌いな海は脅してさっさと済ませようとしているようだ。

２４　脅し（後書き）

ああー！！時間過ぎたーー！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4503y/

大海賊時代に来た死神

2011年12月9日01時06分発行